

東京中心部流通・交通施設巡検

若麻 績 明 里

7月1日。快晴。千歳先生の御指導のもと、東京における流通・交通施設巡検が築地の中央卸売市場二階の会議室で中央卸売市場における生鮮食料品の流通の仕組みと実態についてお話を伺うことからスタートした。築地市場は、その施設の規模、取り扱い量、ともに比類をみない、日本一の市場である。私たちが訪れた午前九時半過ぎ、という時間帯はセリがすでに終り、早朝の熱気漲る雰囲気はほとんど感じる事ができなかったが、左右の中卸業者の店舗には各地から集ってきた多種多様の鮮魚類が所狭しとばかりに並べられ実に壮観であった。活きも形も申し分ない伊勢海老や真鯛に目を奪われながら、ひと通り市場内を見てまわった。

中央卸売市場といえば、私たちは即築地市場を思い浮べてしまうが、都内には他に12の市場がある。「魚河岸」という呼び名で親しまれている築地市場は、東京都中央卸売市場の中心としてその中でも最大規模を誇り、特に水産物は都内の全市場の取り扱い量の91.8%を占めている。築地市場を中心とした中央卸売市場は、開設区域内の生鮮食料品等の円滑な流通を確保するため卸売の中核的拠点となり、合わせてその区域外の広域にわたって生鮮食料品等の流通改善の要となる、という重要な役割りを果している。

生鮮食料品は、その供給量が自然条件によって非常に大きく左右され、放任しておくとは過度な競争や、不当、不合理な取引が横行しかねない。これは生産者、消費者双方に不利益を与えるだけでなく、生鮮食料品そのものが非衛生的な取り扱いを受ける危険性にもなる。このようなことから、中央卸売市場のように公共施設として管理運営することは大きな意義があるのである。最後に私たちに最も身近なサンマを例にとってセリがどのように成立するのか具体的な説明も加えていただき、私たちは築地市場を後にした。

昼食後はその築地市場からほど近い、海上保安庁水路部で、海図の作成工程を中心に見学する。海図とは、広義には海の地図一般を指し、又狭義

には「航海の直接手段として使用することを目的として水深・底質・流れ・航路標識・陸上の地形・地物など航海に必要な事象を表現した」海の主題図である。近年、海図作成において、合理化をはかるため、自動図化用の機械が導入されており、実際にダイナミックに作図している状態を見学したが、それ以上に海図の編集から製図に至る、緻密な手作業の工程は印象深かった。

海上保安庁水路部、といういかめしい名称から、訪れる前は業務内容を容易に想像できなかったが、同庁は、海図製作の他に領海調査や、地震予知のための観測など重要な任務に携わっていると伺う事ができたのは、貴重な体験であった。

今回の巡検で最後に訪れたのは水路部から歩いて15分程。JR新橋駅近くの汐留操車場跡地である。国鉄事業団の所有する汐留操車場跡地は都心に残された最大の用地として東京都と港区の共同出資のもとに整備計画の調査、企画を行う、レールシティ汐留企画を発足させるに至った。この跡地に関しては昨今、新聞報道などで度々目にするが、この22haの広大な敷地に立ってみると、百十四年の日本鉄道史の原点ともいえるこの地がこれからどのような変化をとげていくのか、あれこれと想像してしまふ。汐留の歴史は江戸時代の埋立にはじまり、いわばウォーター・フロント開発の先駆的な地だった。往時をしのばせる遺跡を見学し、その後でこの汐留地区では臨海新交通システムも組みこんだ、多機能都市空間の形成を目指し、着々と計画が進められているという現状を模型で詳しく説明していただいた。

一極集中や、夜間人口の減少など、東京が抱える様々な問題解決のために、職住が均衡した多心型の都市形成を求めていく、という汐留地区の再開発計画は、ひとつの壮大な「実験」として、今後注目されつづけていくだろう。

東京を中心に生活をしている私たちであるが、東京の過去・現在・未来をあらためて考えてみるためにも今回の巡検は意義深いものだった事を最後につけ加えたい。（7月1日 千歳教官指導）